

新学習指導要領がめざす教育を担う教員の育成

教職基礎セミナー（英語科）Ⅰ～Ⅳ 実践報告

How to foster teachers who aim to realize the New Course of Study

A Teaching Report on Basic Teacher Training Seminar (English)

百瀬 美帆

MOMOSE Miho

要 旨

将来教職を希望する学生のために 2017 年度に新たに設定された教職基礎セミナーⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ（英語）履修者が将来教職に就いた時に指導の拠り所とすべきは、2020 年以降に施行される学習指導要領である。はじめに新学習指導要領が目指す教育について論じ、次に指導要領が目指す教育を実現する授業の実践報告を行った。実践報告で扱った履修者は 2017 年入学の英米語学科学生 20 名である。

うな前文が付されている。

1. はじめに

2017 年 3 月に告示された文部科学省の「中学校学習指導要領」2018 年 7 月に告示された「高等学校学習指導要領」は中学校では 2021 年度完全実施、高等学校では 2022 年度から年次進行で実施される。現在大学で教職課程を履修する学生はまさにこの新学習指導要領を具現化する教員を目指しているのではあるが、ほとんどの学生にとっては中学校・高等学校で経験したことがない授業を指導しなければならないこととなる。このような学生たちを明海大学にける 4 年間の教職科目履修を通して英語教員として育成する授業のうち教職基礎セミナー（英語科）Ⅰ～Ⅳにおける実践を報告する。

2. 新学習指導要領がめざす教育

2.1 社会の変化に対応する教育

新学習指導要領には教育基本法を踏まえて次のよ

「これからの学校には、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。このために必要な教育の在り方を具体化するのが、各学校において教育の内容等を組織的かつ計画的に組み立てた教育課程である。教育課程を通して、これからの時代に求められる教育を実現していくためには、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を

図っていくという、社会に開かれた教育課程の実現が重要となる。(文部科学省, 2017, p1)」

「よりよい社会の創り手」あるいは「社会の一員」となるという教育の目的は目新しい概念ではないが、「社会」そのものは劇的に変化を遂げつつある。この変化を30年前に見抜き、教育のめざすべき方向性を示唆しているのが「思考の整理学」(外山滋比古 1986)である。筆者は中学校と高等学校を指して「学校は受動的に知識を得る能力が高いグライダー人間をつくるに適している場所」とし、「長年のグライダー訓練の結果、自力飛行の力を失ってしまうのかもしれない」と述べている。これに反して自分でものごとを発明、発見する力を「飛行機能力」と呼び、「この両者は一人の人間の中に同居している。グライダー能力をまったく欠いては、基本的知識すら習得できない。何も知らないで、独力で飛ぼうとすれば、どんな事故になるかわからない。」とも述べている。そしてこの「グライダー」という章は「グライダー専業では安心してられないのは、コンピューターという飛び抜けて優秀なグライダー能力のもち主が現れたからである。自分で翔べない人間はコンピューターに仕事を奪われる。」と締めくくられている。

1986年に論文が書けない大学生を憂いて外山が記した表現は、次に示す学習指導要領の中心的な概念である「学力の三要素」を予言したかのようである。

「豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待される生徒に、生きる力を育むことを目指すに当たっては、学校教育全体及び各教科・科目等の指導を通してどのような資質・能力の育成を目指すのかを明確にしながら、教育活動の充実を図るものとする。その際、生徒の発達の段階や特性等を踏まえつつ、次に掲げることが偏りなく実現できるようにするものとする。(1)知識及び技能が習

得されるようにすること。(2)思考力、判断力、表現力等を育成すること。(3)学びに向かう力、人間性等を涵養すること。」(文部科学省 高等学校学習指導要領, 2017, p4)

2.2 人間性を涵養する教育

英語教育における「グライダー人間」の育成は中学校・高等学校において主流をなしていたと言わざるを得ない。思考の整理学が出版された当時私自身は公立高校で英語教師をしていた。外国人英語指導助手を海外から招致するJETプログラムが開始されたばかりで、私の勤務校にもアメリカ人男性がALTとして配置された。高校1年生の授業開始時に教師2名が、“Good morning! How are you today?”とお決まりの挨拶をすると、生徒たちは全員そろって、“I’m fine, thank you. And you?”と返していた時代である。ある日、このルーティーン直後に一人の生徒が私に近づき、「先生、熱があるので帰らせてください」と申し出た。荷物を持って教室を出ていく生徒を見送ったALTは驚いた様子で、「あの生徒はさっき、満面の笑顔でI’m fine!と言っていたではないか?」「日本では具合が悪いと言っていけないのか?」と質問してきた。当時は“I’m fine, thank you.”と答えるときの表情まで一律化していたのかもしれない。その後英会話学校のテレビコマーシャルでも似たような事例が扱われ、この「オウム返し式挨拶」はあまり聞かれなくなった。30年後の現在、中学生の多くが、“I’m sleepy.”, “I’m hungry.”, “I’m tired.”などと答えるようになった。何通りかの表現があり、自分自身の体調や気分に合わせて返答をするのだから30年前ほどグライダーではないが、これもまた学習指導要領第3節「外国語科の目標」に示されている「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」が不足した返答と考えられる。「外国語によるコミュニケーションの中で、どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのかという、物事を捉える

視点や考え方であり、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」(文部科学省 高等学校学習指導要領 外国語・英語解説, 2018, p13) すなわち、授業開始時の挨拶でいきなり「疲れました」、「空腹です」という表現は、その表現の背景となる文化や使用場面としての理解が適切なのかということになる。

教職基礎セミナーⅠの授業開始時に同じ挨拶を試みると、やはり“I’m fine/tired/hungry/sleepy.”のせいぜい4種類程度の答えが返ってきた。“I’m sleepy.”と言った学生には、“How long did you sleep last night?”, “Why did you go to bed so late?”など次々に質問した。“I’m sick.”と答えた学生には、「具合が悪いなら帰るべきだ」と促したり、他の学生に「なぜ具合が悪いクラスメイトがいるのに、心配しないのか?」「病状を尋ねるべきだ」「励ますべきだ」などと指導した。これらのやりとりを通じてこれまでに学んだ知識としての表現が、時には会話を広げるアイスブレイキングの役割を果たしたり、友人への思いやりを示す道具になったり、あるいはそれ以上の会話を拒否するための道具にもなりうることを指導することが、学生の人間性としての力、他者と共存するためのシンパシーを育てることにつながる。

同様のやりとりは、中学校、高等学校はもちろん、小学校英語でも行われるであろうが、学生が教師となりこのやりとりを指導する際には、その表現に載せる気持ちがなければならないことを知らなければならないし、これは講義からは学べない。生徒の人間性を涵養するためには、まず教師自身がよき社会の一員でなければならない。

このことから、教職基礎セミナーⅠ・Ⅱでは履修学生が英語の知識・技能を獲得できるようにすると共に、「一人一人の学生が、自分のよさや可能性を

認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓く」経験をさせること(学習指導要領前文)」を根幹の目標とした。今後どれほど優れたAIが開発され、知識・技能の習得を助けるプログラム等ができたとしても、その知識や技能を使いこなす人間性の育成は人間の教師にしかできないのである。

2.3 人間性を涵養する授業実践例 教職基礎セミナーⅢ 「Without you…の授業」

- (1) ねらい 一人一人の学生が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重すること。
- (2) 学習到達目標 「Without you,に続く仮定法を含む表現」を使って友人の存在への感謝を書くことができる。
- (3) 活動手順

ア. 教師が学生に馴染みのある人物にのよさを尋ね、学生があげたキーワードをホワイトボードに書き出す。その際にその人物のよい行動や個性だけをあげることで、外見については言及しないことをルールとする。

イ. キーワードを使って事実を示すモデル文を口頭で提示する。

例) Ms. X is hardworking. Mr. Y sometimes shares his lunch with me.

Ms. Z is the first person to come to the classroom.

ウ. 学生をグループに分ける。

エ. グループごとに他のグループの構成員についてよいところを話し合わせる。その際に教師がどんな些細なことでも、その人がいるからこそクラスが成り立っているなどのモデルを示す。

例) Ms. Z always comes to this classroom earlier than the others and always

turn on the air conditioner. Ms. Z, thank you for turning it on. Without you, I would have to start my class in a worse condition.

下線部をホワイトボードに書き出す。

- オ. グループの中でメッセージカードを書く相手を割り振る。
 - カ. 各自メッセージカードを書く。教師は学生個々のライティングを援助する。
 - キ. 書き終えたメッセージカードを相手に手渡す。
 - ク. メッセージへの感想を述べることで自分自身の存在感を認識する。
- (4) 評価 ライティングを援助する際に「書くこと」について観察評価する。
- (5) 授業の成果

メッセージカードを受け取った際に誰よりも喜んだ学生の感想が、この授業実践がねらいを果たしたことを物語る。

その学生は教職クラスに自身の存在感を見出せないまま1年が過ぎてしまい、欠席することも多かった。ところがメッセージカードには、雨天時に傘を貸した友人からの謝辞と友人として大切に思っているという気持ちが書かれていた。自分が気づかないところで友人が自分の価値を見出してくれていたことを知り感動し、2年時には授業を欠席せず、ボランティア活動にも参加するなど、大学生活に前向きに取り組むようになった。

2.4 学びに向かう力を育てる評価

学びに向かう力をもった学習者は自律した学習者であり学習者の理想像である。中学校、高等学校の現場で生徒全員が自ら学ぶ力を有していれば、保護者や教師にとって誠にありがたいことである。

しかしながら、これまでの学校教育で育てられてきた生徒たちの多くは自ら動力を持たないグライ

ダー型で、そこにエンジンをつけるにはどのようにすればよいのか。ここでは評価という観点から考え、実際の授業実践を2.5で紹介する。

学習を登山に例えるなら、初級登山者にとっては到達目標である頂上が目に見えていればこそ歩を進める意欲がわく。初めはインストラクターの指導に従い登山に不可欠な基礎体力を鍛え、様々な種類の登山道を歩くための道具の選び方、地図の読み方、天気図の見方などを学び、学んだ知識や技能を使いながら実地訓練を行い1つ目の山の頂上に到達する。道中は仲間と励まし合いながら計画に従って登り、ペースが遅い登山者には援助が与えられる。ガイド役のインストラクターは計画通りに登山が進んでいるかどうかを評価し、登山者はこの評価を励みに先へ進む。こうして頂上に到達した登山者が得た達成感、また山に登ろうというモチベーションとなるはずである。この例えとは逆に、ガイドは登山教室で講義するだけで、実地訓練はなし。目指す頂上は見えずにただただ登るのでは、登山が大嫌いになる者がでるのも当然である。

自ら進んで次の頂上を目指す学習者は「自律した学習者」である。Holec (1981) は、自律した学習者とは「自分にどのような学習が必要であるかを見極め、学習のゴールを決め、その学習に必要な教材を選択し、自分の得意な部分を認識し、適切な学習のペースや時間配分を決め、学習の進捗具合をモニターしたり、学習を評価したりすることができる学習者」であるとしている。(日本語訳は尾関他(2006)による)。この定義をそのまま学校での授業にあてはめることはできないが、先にあげた登山の例と合わせて考えることで、授業を通して自律的学習者を育てる工夫を見出していきたい。

まず生徒が目指す頂上、つまり英語学習の目的はどこに置かれているのか。文部科学省が平成29年度に行った英語力調査(高校3年生)では、「身に付けたい英語力」について、34.9%の生徒が「海外旅行などをするときに、英語で日常的な会話をし、

コミュニケーションを楽しめるようになりたい」と回答し、次点の「大学入試に対応できる力を付けたい」の19.5%を大きく上回っている。またこの質問項目と「話すこと」の調査結果（得点）とのクロス集計によると、「話すこと」においてB1レベルの得点をとった生徒のグループでは、60.1%が「英語を使って、国際社会で活躍できるようになりたい」と回答しており、この傾向は他の3つの技能についても同様に見られるという結果がでている。つまり、多くの高校生のゴールは卒業時にあるのではなく、生涯のどこかにあるのである。もちろん教師は教え子たちが卒業後、自分自身のゴールに到達できたかどうかを検証することはできない。しかし、在学中に鍛えられた次の登山へのモチベーション、すなわち「学びに向かう力」があれば、教え子たちは次の山に登るはずである。

私が高校教員として最後に勤務した公立高校では、英語を実技科目として扱い教務内規の実技科目の評価割合を適用した結果、「定期考査の結果4割、実技評価4割、授業内での活動等の評価2割」で評価している。定期考査ではリスニングとリーディングに関わる知識・技能をペーパーテストで測り、授業中に行っているアウトプット活動としてのスピーキングとライティングの力は定期考査とは別日程で行うパフォーマンステストで測定している。この評価の改善により、それまで単なる授業中の活動で終わっていたスピーキング活動が他の3技能と同等に扱われるようになったので、生徒にとっては「話したい」というモチベーションとなった。また定期考査内で行われていたライティングの評価が別日程で行われることにより、まとまった内容について自分の考え等を書いて表現する時間が確保されるようになり、生徒は自分自身の得意とする技能についてのテストで苦手分野の低評価を補うことができる。こうした評価に慣れている高校生にとっては、大学入試に4技能を測るテストが導入されることはまったく問題にならないのである。

2.5.1 指導と評価の一体化を示す授業実践例①

教職基礎セミナーⅡ 朗読劇の授業

- (1) ねらい 予め評価方法を示すことにより、学生が到達目標の達成を意識して学修すること。
- (2) 学習到達目標 小説の内容を理解して、登場人物の感情が伝わるように音読できる。
- (3) 活動手順
 - ア. 短い小説（The Gift of Magi, The Last Leaf, The Selfish Giant）を読み内容についての理解確認をグループ内で行った後、クラス全体で行う。その際背景的知識等については教師が情報を与えて理解を援助する。
 - イ. グループごとに朗読劇を演じる作品を選ぶ。
 - ウ. 10分以内で発表できるように、グループごとにシナリオと背景を作成する。（授業外の活動）
 - エ. 配役を決めて音読の練習を行う。教師は発音等の援助を行う。
 - オ. グループごとに発表する。
 - カ. 他グループの発表を評価する。
- (4) 評価 あらかじめ示した*評価方法に従って、音読とシナリオを評価する。
*次ページの評価表のとおり。

(5) 授業の成果

評価項目を予め与えられることにより、学修者は次の点を意識して活動を行うことができた。

1. 登場人物の「感情が伝わるように音読できる」ようにするために、黙読による内容理解活動において表面的ではなく、深い理解ができたという振り返りがあった。
2. 朗読のための内容理解には背景文化の理解が必要であることを学生自身が見出し、自発的に教師に質問することで学修をすすめ

る態度が養われた。

3. シナリオの評価が評価全体の50%であることを予め示しているのに、グループ全員が内容を理解してシナリオ作成にあたる動機付けとなり、平均1900語以上の各作品を集中して読み込むことができた。

(6) 課 題

朗読劇に仕上げるための発音指導、表現指導のために模範音読の音声を生徒全員に配布するための方策が見つからないまま、生徒に準備を余儀なくさせることとなった。

* 評価表

Title	The Gift of Magi		The Last Leaf		The Selfish Giant	
Who plays the role?	Name		Roles			
Scenario Self-check	Name		Name		Name	
	Name		Name		Name	

Teacher's Evaluation
Scenario

Good	Nice	Great	Excellent	Outstanding
10	20	30	40	50

Performance

Names																
Voice	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
Eye-contact	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
Expressions	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
Team Bonus	0 1 2															
Team Total																
Comments																

2.5.2 指導と評価の一体化を示す授業実践例②

教職基礎セミナーⅣ Mr. Men の授業

- (1) ねらい 授業中のコミュニケーション活動において教師役となり観察評価を体験すること。
- (2) 学習到達目標
 - ① 内容に関する質疑応答を通じて生徒が内容

を適切に理解しているかを確認することができる。

- ② 生徒の理解の程度を把握し、理解が遅い生徒には適切な支援を行うことができる。
- (3) 指導手順 学生が記入した次ページのワークシートによる。(実際には A3 サイズ横の仕様)

Mr. Men
Instructor: Miho MOMOSE
No.1 September 19, 2008

(1) Pronunciation Practice

(2) Make English Classes More Fun
1. Read as many books as possible for 20 minutes to choose your favorite.
2. Outlining: Read a book from Mr. Men collection

1 Who is the main character? Mr. Nobody is a person who is invisible.

2 What does he want to do? He wants to love like I do.

3 But, No one knows about him.

4 So, He went to happy's home.

5 Then, When he drink coloured liquids he got color.

Before you start, you'd better know the words.

2. Vocabulary - Choose at most 7 words / idoms that you think readers should know for understanding the story. You can draw pictures to help your students understand better.

Word / Idiom	Example sentence
spring (n)	I have to buy a new mattress because it has lost its spring.
enquire (v)	to ask sth for some information
whistle (v)	a small metal or plastic tube that you blow to make a loud high sound, used to attract attention or as a signal
ridiculous (adj)	very silly or unreasonable
swiff (v)	to brush or wipe things away in a way that makes a sound, especially when you are crying, but a cold, etc
gasp (v)	to take a quick deep breath with your mouth open, especially when you are surprised or in pain
sob (v)	to cry noisily, with big sobs, tears, or breaths
eventually (adv)	at the end of a period of time or a series of events

3 Make 5 True / False Statements to check your students' understanding.

Statements	Answers
1 Mr. Happy didn't walk because the bus came.	T / F
2 Suddenly it started to rain when he was walking.	T / F
3 Mr. Nobody could not get off the tree so he cried.	T / F
4 He had to drink something to change.	T / F
5 He changed the color except his face.	T / F

4 Choose a page that you think is the most effective for your students to practice reading aloud.

5. Choose 5 - 7 pictures with which you can describe the outline of the story. You can refer to 1. Outlining. Write a few words which will help your students retell the story.

Pictures	Words
	walking
	staying
	to get help him
	wizard
	get a color

6. Choose one sentence which includes the grammar target and explain the grammar rule by giving more examples.

Student ID: 1211 11-0 Name: Ryoichi Matsuura

- ア. 各自 Mr. Men (全 47 冊) から選んだ 1 冊を読み、アウトラインをパートナーに説明する。
- イ. ペア毎に同じストーリーを担当する。(Mr. Men は 2 セット用意してある。)
- ウ. ワークシートにしたがって、ストーリーのアウトラインをメモする。(ペア)
 - *ストーリーのアウトラインは教職基礎セミナーⅡから継続して行っている。
- エ. 担当したストーリーを初見で読む生徒が、アウトラインを把握するために必要な単語

- を最大で 7 つ選び、例文を使って語彙の導入をする準備をする。(ペア)
- オ. ストーリーの理解を確認するための True or False Statements を 5 文作成する。(ペア)
- カ. 生徒役の学生が Outline Telling する際の visual aids となるようなイラストを作成する。(ペア)
- キ. 生徒役の別ペアと組んで教師役を経験する。(2 ペア)

(4) 評価 下の評価表により，先生訳のペア，生徒役のペアを教師が評価する。

(5) 授業の成果

学生自身が教師役と生徒役を務めることにより，観察評価の視点を理解し，評価できる質問を作成するなどの工夫を施すことができた。

また教師役学生が生徒役学生の理解が不十分だと判断した際に与える付加的な質問の有無を評価したので，学生はフォローアップクエスチョンの必要性を理解した。

(6) 課題

2 ペアの学生が活動する様子を観察して評価を4回行った。そのうちの1回は他に2名の教員に協力を依頼して，3名で一斉に観察し評価を行ったのだが，1人の評価と比較してより客観的な評価を行うことができた。

このようなパフォーマンス評価においては評価の公正性を保つことが非常に難しいので，今後のパフォーマンス評価方法の研究につなげていきたい。

Evaluation

Teachers (who speaks)	3	2	1
Introduction	Can elicit students' interest enough	Can elicit students' interest somehow.	Give too much information
Vocabulary	All words are explained or defined clearly.	2 words are explained or defined clearly.	1 word is explained or defined clearly
T or F Questions (1)	All statements are related to the story	2 statements are related to the story.	1 statement is related to the story.
Follow-up Qs	Can add effective extra questions.	Can add extra questions.	
	BONUS POINT +3 Good enough to check students' understanding of the outline.		
Retelling (teacher's instruction) (Name)	Instruction is clear enough.	Well-done.	OK.
Students	3	2	1
Introduction (Both students)		Active listening	Not so active
Vocabulary (Both students)		Active listening	Not so active
T or F Questions (1) (2) (3)	Besides the T or F Question, can answer extra questions.	Can answer T or F Questions.	
Retelling (Both students)	Can follow the story.	Can explain each picture.	Can give related words, but not in sentences.